

現代における自己意識・他者意識の研究

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■プロジェクトの問題意識

これまで心理療法は、西洋の近代的自己意識や主体の成立を前提としたものであった。それは心理療法が19世紀から20世紀初めにかけて成立してきた事実にも反映されている。自分で自分を振り返る自己意識は罪悪感や劣等感などを生みだし、さらにそれは神経症的な葛藤や症状にもつながっていく。心理療法自体まさに自分を振り返る場として機能していたのであり、心理療法においては症状の生成にも治療メカニズムにも自己意識や内面の成立が基本的な前提条件とされてきたのである。

日本では、西洋ほど明瞭な自己意識がみられることは少ない。しかしその中で、箱庭療法の普及にも認められるように、ものに魂を認めるような前近代のあり方が残る日本人の意識の曖昧さも生かしつつ、自己意識を前提とした心理療法が行われてきた。ところが近年では、対人恐怖をはじめとするいわゆる神経症が激減し、解離性障害、暴力や自傷などの行動化、発達障害など、葛藤や自意識の問題が認めにくいケースが増加して、これまでの心理療法のパラダイムが通用しないことが多くなってきた。本プロジェクトは、こうしたところの問題の変遷の背景にあると考えられる現代の意識のあり方を捉え、それがどのように新しい可能性に開かれているのかを考える上で、これまでの日本にみられた意識のあり方を参照し、より広い視点から検討を行うおうとするものである。

■サブプロジェクト:

『遠野物語』の新しい〈読み〉

このサブプロジェクトでは、臨床心理学者に加え、赤坂憲雄らの民俗学者、古代文学が専門の三浦佑之らの連携研究員が共に柳田國男の『遠野物語』を読み、20世紀初頭にみられた日

本人の意識について多層的、多角的に研究を行っている。そのなかで東日本大震災を受けて、『遠野物語』第99話が検討された。これは明治29年の三陸大津波の際の話で、概要は以下のようである。

福二という男が大津波で妻子を失い、1年たった夏のはじめの月夜、便所に起きてみると、霧の中から男女が近づいてくる。女は亡くなった妻であった。思わずあとをつけて名を呼ぶと、振り返ってにこと笑った。男も同じ里の者で津波で亡くなったのだが、福二との結婚前に妻が心を通わせていた男だった。女は、今はこの人と夫婦になっていると言うので、福二が子どもはかわいくないかと問うと、女は少し顔色を変えて泣く。福二が悲しくなって足下を見ている間に男女は見えなくなった。追いかけてみたが、ふと死したる者と気づき、夜明けまで考えて帰った。その後、福二は久しく煩ったという。

お盆は、亡くなった人と再び会える機会として日本人のこころになじんできた。福二も初盆の夜に妻と再会する。目前に現れた妻を福二は追い、声をかける。今は別の男と連れ添っていると妻に、福二は子どものことを持ち出すが、妻は姿を消してしまった。このような物語の展開を考えれば、妻が福二の元に現れたのは、妻と再び「出会う」と共に、「別れ」を体験するためであったのかもしれない。津波は無残にも福二と妻をこの世とあの世に分断してしまった。けれども、このような物理的な別れは、必ずしも心理的な別れを意味するわけではない。妻が福二を置いて消え、最後に、男女が「死したる者」であると気づいたことで、福二と妻の別れは決定的となる。これこそ、福二がこころのレベルでも妻を「喪失」した瞬間である。そして、その後の福二の病が示すように、

この喪失は、福二に妻の存在の大切さを教えるための「出会い」でもあった。

東日本大震災の大津波がもたらした途方もない被害を思ってみても、私たちのこころは、いくら物理的に離れてしまっても、大切なものとの別れを簡単には体験できないものと思われる。この物語の結末は、喪失を体験して生きる個人の苦悩を一方では映し出している。特に未曾有の災害では、どのように傷や悲しみを「癒やす」かということに目が向けられがちである。しかしこの物語は、人は本当に大切な存在を失ったとき、引き裂かれるような苦しみを通してこそ、その存在の大切さを真に体験するのだということを教えてくれる。福二という個人の「小さな物語」としては切なく悲しいこの話は、心理学的にはこのような「大きな物語」として読むこともできる。

もちろん、現実を生きる人々に関わる場合にはこうした「大きな物語」に沿わねばならないわけではない。我々は日本箱庭療法学会と日本ユング派分析家協会合同で震災対策ワーキンググループを立ち上げ、「ケアする人のケア」をテーマに活動してきた。こころの未来研究センターでは、畑中千紘助教と長谷川千紘研究員が事務局員として活動をサポートしてきた。その中で被災地で聞かせてもらった話は、個人の「小さな物語」には収まらないほど耐えがたいものであることが多い。

一方、この震災では、原発問題に代表されるように、これまで日本人のこころになじんできた“無常観”のような「大きな物語」でも収まりがつけられない問題も多く残っている。実際には「小さな物語」と「大きな物語」のはざまに、どのように収まりをつけられるかを個々が選択していくのであり、臨床的な支援はそれを支える役割を担わなければならないだろう。